

洛中洛外図屏風から戦国日本を考える

千葉県立成田国際高等学校 秋山 真一

1. 実施学年：高等学校第3学年 教科：日本史B

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

①主題名 洛中洛外図屏風から戦国日本を考える

②ねらい

学習指導要領では「各時代の特色を総合的に考察する学習、及び前後の時代を比較してその移り変わりを考察する学習」の充実を図ることが謳われているが、洛中洛外図屏風は、そうした学習内容を具現化するためにうってつけの素材であるように思われる。16世紀前半の京都という場を見渡すことによって権力のあり方から風俗の状況に至るまでをトータルに把握する視座を得ることが出来る。また、洛中洛外図屏風(第一定型)が中世末期という限られた時期に制作されていることから、テーマを絞って考察する学習を行えば、必然的に中世から近世への変容を含んだ分析がなされ、生徒各自がダイナミックな歴史の変容に立ち会うことを可能にするように思われる。ここでは、歴博甲本を学習素材として取り上げ、班別学習を行う。班毎にテーマを決め、それを入り口として戦国時代の京都ひいては日本がどの様な状況であったかを可能な限りトータルに把握することを目的としている。

③博物館との関連

(1) テーマについて

国立歴史民俗博物館では、複数の洛中洛外図屏風を所蔵している。中でも甲本は、現存最古の屏風であり、第一定型と呼ばれる戦国期の京都を克明に描いたものとして知られている。この洛中洛外図屏風を入り口として、当該期への謎を持たせそれと向き合う中で、中世から近世への移行というダイナミックな動きを一人一人が自分なりに把握する契機をつかもうとする。特に甲本研究は、歴博の小島道裕教授を中心に近年、精力的な研究がなされており、新しい歴史像の発見をリアルに感じながら生徒達自身の謎解き作業を進めていくことができる。

(2) 博物館活用の視点

まず、歴博甲本の持つ実物の存在感は圧倒的である。資料保存のために照明は落として展示されており、描かれている対象を観察するためにはタッチパネル等のほうが明瞭であるが本物と向き合った感覚は何ものにも代え難いものがある。じっくり、屏風を観察する中でいろいろな思考が頭を駆けめぐらさずである。その点について小島氏は、「絵画資料の場合、もちろん前提となる史実や絵のルールなどの知

識は必要だが、『何だろう』『誰だろう』という疑問から絵を読んでいくという限りでは、読み手が誰であろうと違いがあるわけではなく、読み解きに参加するのは比較的容易である」と述べている（小島道裕『描かれた戦国の京都』2009年、吉川弘文館）。そして、歴博では二次元の絵画史料を見た後に、展示資料を見ることで確認、比較、思考の深化を遂げさせることができる。中世史資料を一周見学した後に洛中洛外図屏風をもう一度見返すことによって、自分たちの設定した課題解決への視点を得ようとする。

3. 指導計画

①活動計画（5時間扱い、特別授業1時間扱い）

学習活動と内容
<p>第1次 洛中洛外図屏風に関する基礎知識の習得と観察</p> <p>①洛中洛外図屏風についてのレクチャー</p> <p>②班に分かれる、使用資料の配付</p> <p>③個々人で洛中洛外図屏風の一部分について「モノ、コト、人物」の観点から観察し、自分の観察したことをワークシートに書き込む。</p> <p>④それをふまえて、自分の感じた謎を一人、3点以上ワークシートに書き込む。</p> <p>⑤班内で一人一人の観察したことを発表し、班として調べるテーマを絞り込んでいく。</p> <p>第2次 班としてのテーマ決定</p> <p>①歴博 web ギャラリーに入り、歴博甲本の画面を出す。</p> <p>②屏風全体を見渡ししながら自分たちの設定したテーマにかかわる事象をできるだけ多く発見する。必要な場合は、課題を修正・変更していく。</p> <p>③班の課題を最終的に決定する。</p> <p>第3次 図書館調べ学習</p> <p>①歴史事典、関連図書等を使用してテーマにかかわる素材を集める。</p> <p>②必要と思われる内容をワークシートに書き込んでいく。</p> <p>③調べた内容を持ち寄り、班で設定した「謎」への仮説を可能な限り説いていく。</p> <p>特別授業 歴博見学</p> <p>第4・5次 班ごとに発表</p> <p>①一班の発表時間は、7分。その後、質疑応答時間をとる。</p> <p>②審査は生徒相互に行う。観点別に5項目×5点、計25点で採点をする。 (自分の班については採点しない)</p> <p>③その場で集計し、優秀班を表彰する。</p>

②歴博を利用した授業の展開

(1) 対象者：授業を受けている者の中の希望者（12名が参加）

(2) 目標

- ①洛中洛外図屏風を窓口として中世社会に対する理解を深めることができるか。
- ②自分のテーマに関する思考を深めることができたか。

(3) 展開

過程	時間	学習活動○ 学習内容●	指導上の留意点
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> ●担当の方に挨拶をする。 ●単眼鏡を借り、使用法を確認する。 ○パンフレットを見て、中世展示室を俯瞰する。 ○ワークシートを受け取り、氏名を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○中世展示室の構成を確認する。
展開 (120分)	15分	<ul style="list-style-type: none"> ●甲本を観察する。 ○単眼鏡を使用して興味を持った箇所を精緻に観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教員は、可能な限り、展示説明を洛中洛外図屏風と関連づけながら説明を行う。 ○全体で周りながら、後に自分で観察する資料について考えておく。 ○メモは、できるだけ自分の観察したことを記入することを心がけ、キャプションは補助資料として使用する。
	55分	<ul style="list-style-type: none"> ●教員による説明・解説 ●生徒の質問を受ける。 ○説明を聞いているときに疑問が生じたことを質問する。 ○説明、観察したことで気づいたことをワークシートに記入する。 	
	50分	<ul style="list-style-type: none"> ●自分たちで観察 ○自分が展示見学を通じて聞いたり、調べたことを整理する。 	
まとめ	20分	<ul style="list-style-type: none"> ●ガイドンスルームにおいて復元屏風を観察する。 ●一人一人が展示観察を通じて気のついたことを発表する。 ○復元屏風を使用しながら、気づいたことを発表する。 ●単眼鏡を返却する。 ●担当の方にお礼の挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○疑問は疑問として残しつつ、自分たちのテーマに即した発表を行う。

4. 実践の概要

【第1時】

①洛中洛外図屏風について既知の確認

- (1) 「洛中洛外図屏風について知っていることは？」との問いに対しては織田信長とか京都全体が書かれているとの答えが返ってくる。今年は、大河ドラマ「天地人」で洛中洛外図屏風が登場したこともあって知っている者も多かった。
- (2) 資料集で洛中洛外図屏風について確認（『新詳日本史』浜島書店）。その説明文を読み、信長が上杉謙信に送ったと書かれていることを確認した後、黒田日出男氏の研究を利用して、狩野永徳が描いた年齢と信長が送った年がうまく合わないことについて、どうしたら両者を統一的に理解できるかを若干考えさせる。これは、屏風には謎がたくさんあることを提示するための投げかけなので、あまり時間はとらない。その後で、資料集を引き続き、屏風に関する基本的な数え方などを示してい

く（隻、扇などのこと）。

②歴博甲本を使用しての授業

- (1) 班ごとに机を寄せ合う。
- (2) 班長は、人数分の資料を教員の所に取りに来る。

〈配付資料〉

左隻2扇・3扇下方部（カラーコピー、A4×4枚）、左隻・右隻全体図モノクロ（B4、各1枚）、現在の京都地図、ワークシート（1枚）

※1：カラーコピーはデジカメで『洛中洛外大観』の該当頁を撮影し、パソコンに取り込んでプリントアウトした。

※2：左隻・右隻全体図は、後に場所の提示をしやすいように3段に区切り、ABCの符号を振ってある。指示するときは例えば、「左隻2扇Cの上」といった形となる。

- (3) 洛中洛外図屏風はいくつもあることを述べ、今回、使用するものは歴博甲本であることを提示し、甲本の特徴について説明をする。
- (4) 甲本を使用した最初の発問「カラーコピーに描かれている人々の中で一番偉いと思う人は誰か?」。生徒達は家の立派さや着ている服などから偉い人を選び出そうとする。その中で、家の後ろの方で顔が全部見えない細川高国を発見する者が現われる。小島教授の研究に従って高国によってもたらされた京都の平和を描いたものであることを確認する。
- (5) ワークシートを一人一人が作成する。最初の課題は「4枚のコピーを見てできるだけたくさんの人・モノ・コトを発見する」である。それを行った後、第2の課題である「見ていて不思議だと思ったことを3点以上指摘する」に移る。
- (6) 見つけたことや疑問点を班員で発表しあう。その中で班として調べていくテーマを絞り込んでいく。

【第2時】

- ①CAI教室に集合。班毎に固まって着席。
- ②各自、パソコンを起動させ、歴博webギャラリーの歴博甲本の画面を出す。
- ③ワークシートを一人一人に配布。
- ④細川高国邸の場面からスタートし、自分たちのテーマに関連する事項を拾い出してワークシートに記入。その他、気になったものもシートに書き出していく。
- ⑤班長は、適宜、班員を集め、協議をしてテーマの最終決めを行う。
- ⑥各自、あるいは班員で相談をしながらテーマに関する事項を拾い出し、調べていったらよいこと、疑問点等をシートに書き出していく。

【第3時】

- ①図書室に集合。班毎に固まって着席。
- ②各自に調べ方の説明資料を配付。この時間は、謎を解き、発表のためのレジュメ作りの時間であることを説明する。

- ③手持ちの資料集、教科書で関連事項がないかを調べだし、調べていく事項を絞る。
- ④キーワードを見つけた班は歴史学事典、モノの観察を追求していく班は美術全集といった具合に班毎に必要な資料を見ていく。
- ⑤並行して、レジュメの作成も考えていく。

【歴博・特別授業】

①洛中洛外図屏風歴博甲本の実物展示史料を観察する。

〈生徒のつぶやき〉

- ・大きい ・銀閣寺はどこだろう？
- ・祇園祭の脇にいる武具を付けているのはどういう人？
- ・暗くてよく見えない。
- ・物乞いをしている人が、ところどころに見えるがどういうところにいると法則化できるのだろうか。
- ・真っ直ぐ流れる水路にはやはり意味がありそうに感じられる。

②教員による説明

《意図》：洛中洛外図屏風を起点として第2展示室の「大名と一揆」「民衆と生活と文化」のコーナーを見学する。展示をトピックス的に見学しながら、中世後期の世界を俯瞰し、洛中洛外図屏風の世界について思考を深める刺激となることをめざそうとする。

《見学の実際》（「大名と一揆」の部分のみをここでは掲載する）

（1）「毛利元就他 11 名契状」

→円形の署名に注目、お互いが対等の立場であることを確認し、戦国大名が決して専制君主でなかったことに気づかせる。それでは、細川高国の権力はどうかあったのかと疑問をめぐらせることが出来れば、テーマ設定に役立てることも可能となっただけかもしれないが、そのような思考をめぐらせた者はいなかった。

（2）「朝倉館復元模型」

→洛中洛外図屏風に描かれている室町幕府や権力者たちの邸宅に似ていることを気づかせ、京都の文化へのあこがれを持ち、自己をいかにその似姿として演出していったかを確認する。

（3）「一乗谷遺跡出土品」

→朝倉氏の城下町である一乗谷遺跡の出土品からいかに町が多様な職人や商人に満ちあふれ、娯楽も存在していたかに気づかせる。同時期の京都の町と重ね合わせて考えている者もいた。特に数珠作りの各プロセスが並べて展示されているのを興味深く観察していた。

（4）「『京都の町並』復元模型」

→生徒の質問に答える形で対応をした。

（5）「中世京都町組関係地図」

→応仁の乱の前後でどのように京都という町が変貌したかを中心に説明した。乱後の復興した世界を洛中洛外図屏風では描かれていることを再度確認する。

《生徒達自身による観察》

◎観察シートの一例（部分）

- ・風流踊り（輪になって踊っている）
- ・田舎の戦国大名：京にあこがれ、町が京に似ている、枯山水
- ・檜皮葺＝高貴、瓦葺き＝寺
- ・土倉、酒屋めっちゃある一応仁の乱→減る
- ・正長の土一揆→一揆やった記念、負い目（借金）
- ・犬：既に飼っている！！
- ・お金？つなげて大量にある！！
- ・杉玉：お酒屋さん　新しいお酒できましたよお～
- ・乞食：
 - ・表通りにも裏通りにもいる。
 - ・けがをしている？→他の乞食もけがをしてそう。
 - ・足が不自由で動けない。
 - 物乞い？　→医者いないの？　祈祷？
 - ・けっこうみんな物乞いをしている人にあげている。

《ガイダンスルームに戻って感想を述べあう》

- ◎複製洛中洛外図屏風を取り囲むようにイスがセッティングされており、実際に自分が分析したことや発見したことについて発表をする。

【第4・5時】

- ①各班7分の持ち時間で、自分たちの調べたことについて報告する。各班が設定したテーマは次の通りである。

班	D組（41名）	E・G組（合同クラス・27名）
1	なぜ道路に水たまりがあるの？	なぜ権力者と普通の人隣り合って暮らしているのか？
2	洛中洛外図屏風から見る“商業”	なぜ乞食が少ないのか？
3	戦国京都における動物と人間	どうして戦国時代に娯楽が広まったの？
4	戦国にクリスマス？（左義長）	乞食とは何なのか？
5	なんで踊ってねん？	どうして偉い人と庶民が同じ町で暮らしているの？
6	洛中洛外図屏風になぜ四季が？	

※1：授業前日までにレジュメを教員に提出させる。教員は、各班をクラス人数分印刷し、配布する。発表は、そのレジュメをもとに行われる。

※2：授業開始前には班ごとに机を寄せ合い、相談が出来るような体制を取らせておく。発表前に採点シートを配布し、この時間の進め方を説明する。その中で採点シートについても説明する。特に観点の内容については理解が行き届くようにする。

- ②報告後、質問を受け付け、それをめぐっての応答を行う。例としてE・G組2班を取り上げる。

【レジュメ】

テーマ：なぜ乞食が少ないのか（E・G組2班）

〈なぜ乞食が生まれるのか〉

- ・年貢などの食料は都市へと集積されるため、飢饉になると地方から飢えが始まります。そのため飢えた人々は職を求めて都市へ流れ、乞食が生まれます。

〈中世日本の乞食〉

- ・中世では乞食、ばくち打ち、泥棒なども職業の一種と考えられていました。彼らはリーダーのもとで集団行動をし、「座」という“なわぼり”を持ち、個人が得た収入からリーダーに一部を上納したりしていました。乞食は、普段はきれいな服を着てても仕事の時間だけぼろぼろな服を着てたりもしたようです。

〈乞食と仏教の関係〉

- ・当時の乞食は“一方的に物を貰う”のではなく、施した人へ“仏教的満足感”を与える存在とされて、大事にされていたようです。これは「非人＝人」ではなく「非人＝仏様☆」という考えがあったからです。

〈非人を大切にする仏教〉

- ・非人を大切にする仏教の例が叡尊と忍性が行った文殊信仰です。この基本的な考えは、“非人たちは単なる乞食やらい者などではなく、文殊菩薩がこの世に現れるときに変身した仮の姿である”というものでした。そのため、物を与える人も多く、寺の門前などに集まっていたのです。

※結論

乞食達はお寺の前などに集まっていたからこの場面にはお寺がないので、あまりいないんじゃないー！

これに対してはまず、「(職業として乞食をしていたということに対して) 働けるのになぜ、ぼろぼろの格好をして乞食をしていたのか？」との疑問が出された。それに対しては、「もちろん『かたい』と呼ばれるような身体的に障害を持つ者もいたが、一方で組織されている側面もあり、その点を強調した」との応答がなされた。また、「実際に寺の前にいたのか」との事実確認に関する質問が出たが、「調べた限りでは寺の前にはいるものが多かった。しかし、他の場所にももちろんいた」との解答がなされた。寺院前以外にも乞食の姿が見られたのにも拘らず、この班が寺院前にこだわったのは、彼等の考えが仏教との関連に収斂していったからであるが、その点についても疑問が提出された。班員が仏教の考え方を説明したのに対し、「説明にあったのはすべて鎌倉時代の仏教についての考え方でないか。そのことは戦国時代の仏教でも同様に言えるのか」というものであった。戦国仏教についての特徴については調べがつかず「鎌倉仏教も争乱状態の人々のところを救うために生み出されてきたのであって、戦国時代も同じように人々とどいていたのではないか」との一般論の答えにとどまった。さらに「乞食は差別された人々であるのに、なんか菩薩っぽいんですけど」とのつぶやきのような、しかし、根元的な質問が出たが、これについてはレジュメに書かれたことを説明したことを繰り返すにとどまった。このように質疑応答は、一つのまとまった像を紡ぎ出すには至らなかったが、乞食の存在が自分たちが漠然と思っていたものとは異なっており、なにか当時と聖俗関係を考えるための重要

な要素であるということまでは自分たちでたどり着くことが出来た。

※全体の流れについては、小島先生より助言をいただいた。プランを立てた時点で一度、博物館と相談をしておくともよいかもしいない。



展示室の見学



ガイダンスルームでの発表

5. 成果と課題

○成果

- ①カラーコピー、web ギャラリーの使用によって一人一人が洛中洛外図屏風の全体を見渡す作業を行ったことで、図像史料と積極的に向き合い、様々な発見をすることが出来た。
- ②謎を解くというテーマ設定をすることを生徒達には課した。そのため、自分たちが見出した謎の答えを導き出すべく、苦闘する姿があった。思考した結果、結論めいたものを見出すことができなかつたり、安易な結論に至ってしまった班もないわけではないが、考察することの楽しみを知るきっかけとなりえたように思われる。
- ③偶然であるが、同じテーマを選んだ班が同じクラス内であった。同じテーマを選んでも、切り口が違ふと調べる内容も異なってくることを認識することが出来た。
- ④本校は、国際高校であるが、「普通科」と「国際科」があり、「普通科」はおとなしい性向があるが、即事的な質問から入ったせいか、活発な質疑応答がなされ、場合によっては歓声があがるなど積極的な授業参加が見られた。
- ⑤歴博見学においては、歴博甲本（二次元）、展示物（三次元）、文字情報を自分たちが学習してきたことと重ね合わせることで、自分なりの時代像を描き出すきっかけを見出すことが出来た。「風流」を問題にした班はさらさらを体験することで五感を通して中世末期に思いをはせることが出来た。
- ⑥自分たちで、歴史像を紡ぎ出したという実感を持ち得たこと。卒業試験で、その年の印象に残った授業を挙げてもらったが、今年はいつにも増して洛中洛外図屏風の授業をとりあげる者が多かつた。一例をあげる。

自分で調べてまとめたりするのは中学生の時以来だったから、最初は面倒に感じてたけど、やっているうちに楽しくなってきた、今まで知らなかったこと（左義長やクリスマスツリーとか）をたくさん知ることができて本当によい経験ができました。調べて自分の知識にしたものを人に伝えることで、また違った視点から考えられるような気がしたので、大学に行ったらこの授業を生かしたいです。



○課題

- ① 1時間目であるが、盛り込みすぎである。可能であれば、インストラクションの時間を1時間使用して、洛中洛外図屏風に描かれている建物を現在の地図に落す作業などをさせて、空間的把握を行った上でテーマ決定作業に入っていくのがより効果的なように思われる。
- ② 1時間目に使用した「モノ・コト・ヒト」を発見するシートであるが、発見した場所を書き込むようにとの指示を出すものの、次々と発見したモノを書き込むのに手一杯で、なかなか位置を書き込むまでには至らない。しかし、時間が経つと発見した場所がなかなか見つからない場合も多く、見取り図を書き込んだワークシートに改造していく必要を感じた。
- ③ 2時間目のC A I教室でのテーマ決定の授業と、3時間目の図書館での調べ学習は連続しているが、テーマ決めの直後とあって、とまどうことが多く、なかなか切り込んだ調査が出来ないようであった。実はE・G組は新型インフルエンザのために学級閉鎖となったため、補足としてもう一時間、図書館での調べ学習を実施したが、その時はよりスムーズな調査ができたように思われる。テーマ決定後、すこしインターバルを置いて、その間、班員での話し合いや自主的な調べ、あるいは教員との相談時間を設けるなどして、その上での調べ学習の方が効果があがるかもしれない。
- ④ 報告後の質問は積極的にでることが多かったが、なかなか歴史認識を深めていく方向に進まず、その場で終わってしまった感が強かった。これは、教員の司会進行の方法にも工夫の余地があると思われるので、司会力を向上させていきたい。
- ⑤ 一つのテーマに関して歴博を何度も訪れるのは困難であるが、事後学習としてもう一度、屏風の全体をあらためて見るという課程があるとより理解が深まるかも知れない。実物は2週間しか展示されないので、その時にミニチュアの屏風を借りて観察するという方法も可能かと思われる。あるいは、全体を学習した後に考えついた疑問点を集約し、歴博の先生方に代表、もしくは教員が訪ねて、そこから得た知を還元していく方法も考えられる。
- ⑥ 今回、自身に課したのは、誰もが博物館の使用を思い立ったときに、可能な利用形態の一つのモデルを作ることだったが、今後は歴博のソフト面、即ち研究者の知をダイレクトに向き合う場を設ける可能性も探っていきたい。ただ、教師は、学校と歴博をつなぐ触媒であることに、自覚的であり続けなければならぬように思われる。小学生の折にただ見学を強いられて歴博嫌いになった生徒達が、教師と語

り合いながら展示物を見ることで、博物館嫌いを払拭していく現場に何度も立ち会った。そうした状況を乗り越えるためにも、博物館と連携をとりながらより多様な利用法を模索していく必要がある。

6. わたしの考える歴博活用案

①活動計画

学習活動と内容	
第1次	<u>洛中洛外図屏風に関する基礎知識の習得</u>
第2次	洛中洛外図屏風の観察と班別テーマ仮決め
第3次	班としてテーマ決定
	
	インターバルを置く→生徒間、生徒教員間の相談
特別授業	歴博見学
第4次	図書館調べ学習
	
	インターバルを置く→この間、レジュメ作成
第5・6次	班ごとの発表、および質疑応答
事後学習	学習を通じて新たに生じた疑問を検討する

②歴博を利用した授業

過程	時間	学習活動○ 学習内容●	指導上の留意点
導入	10分	○歴博パンフレットをもらう。 ● <u>中世展示室の部分を見て、どのような展示構成になっているかを理解する。</u>	
展開 (120分)	15分	○甲本を観察する。 ● <u>自分たちが今まで調べたことワークシートを持参してきて、調査内容を確認する。</u>	○ <u>新たな疑問点が生じれば、記入をしておく。</u> また、観察結果に疑問点が生じた場合もなぜそのように思ったかを記入しておく。 ○ <u>最初の20分は、キャプションなどの文字情報を可能な限り使用せず、自分の目を通して考えたことを記入していく。</u> その後、文字情報を利用する。
	55分	● <u>教員による説明・解説</u>	
	50分	● <u>生徒の質問を受ける。</u> ● <u>自分たちで観察</u> ○ <u>発見したことを次々にワークシートに記入していく。</u>	
まとめ	20分	● <u>自分が見たり考えたりしたことをワークシートにまとめる。</u> ○ <u>復元屏風を使用しながら、気づいたことを発表する。</u> ● <u>一人ずつ展示観察を発表する。</u>	